



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域住民のヒグマ認識および人とヒグマの関わりから考えるヒグマ対策のあり方 : 北海道浦幌町を事例に
Author(s)	伊藤, 彩乃
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(文学)
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91457
Type	master thesis
File Information	2023itoayano.pdf



令和5年度修士論文

地域住民のヒグマ認識および人とヒグマの関わり
から考えるヒグマ対策のあり方
—北海道浦幌町を事例に—

北海道大学大学院 文学院

人間科学専攻 地域科学研究室

指導教員：宮内 泰介

学生番号：13223087

氏名：伊藤 彩乃

目次

1 序論	3
1-1 背景と目的	3
1-1-1 野生動物およびヒグマと人の軋轢	3
1-1-2 ヒグマ研究の変遷	4
1-1-3 本研究の目的	5
1-2 方法	5
1-3 調査地概要	7
1-3-1 はじめに	7
1-3-2 地理・歴史	7
1-3-3 浦幌町のヒグマ	9
1-4 本稿の構成	11
2 浦幌町の地域住民とヒグマの関係	12
2-1 はじめに	12
2-2 非農業従事者によるヒグマ認識	13
2-2-1 聞き取り対象および地域概要について	13
2-2-2 「身近なようで身近じゃない」ヒグマ	14
2-2-3 ヒグマへのいたわりの感情	14
2-2-4 伝聞から知るヒグマ	15
2-2-5 まとめ	17
2-3 農業従事者によるヒグマ認識	17
2-3-1 聞き取り対象および対象地域について	17
2-3-2 身近な話題としてのヒグマ	18
2-3-3 身近な恐怖対象としてのヒグマ	20
2-3-4 ヒグマによる農作物被害の現状と対策	22
2-3-5 「自分の土地は自分で守る」	24
2-3-6 多様な人が関わるからこそその対策の難しさ	29
2-3-7 「札幌のクマはすごい」	31
2-3-8 まとめ	32
2-4 第2章まとめ	33

3 地域社会目線のヒグマ対策のありかたとは	34
3-1 ヒグマ問題の難しさ	34
3-2 地域でのヒグマ対策を考える	35
3-3 野生動物問題・地域での野生動物管理における聞き取り調査の有用性および役割	36
4 結論	38
謝辞	39
参考文献	40

図表目次

図

図 1 北海道振興局地図.....	8
図 2 浦幌町地図.....	8
図 3 浦幌町農作物被害面積（2020年度）（ha）	10
図 4 浦幌町農作物被害面積（2020年度）（千円）	10
図 5 浦幌町 各地域地図.....	12
図 6 浦幌町 市街地地図.....	13
図 7 浦幌町 農村地域地図.....	18

表

表 1 インタビュー一覧.....	7
-------------------	---

1 序論

1-1 背景と目的

1-1-1 野生動物およびヒグマと人の軋轢

今日、野生動物が人間の生活や生産活動に大きな影響を及ぼしている。その中には、社会問題となっているものもあり、行政側の適切な管理が求められている（鈴木, 2013）。その一例が野生鳥獣による農作物被害である。農林水産省によると、2022 年度（令和 4 年度）の被害額は約 156 億円であり、農村地域にとって大きな打撃となっている（農林水産省）。それゆえ、多くの市町村は、野生鳥獣の被害を軽減するため、「鳥獣被害防止計画」を設置し、この問題の解決に取り組んできた。

しかし、野生鳥獣被害は農作物被害だけではない。野生動物は人間にも直接的被害を及ぼすこともある。その明確な事例が「クマ問題」である。近年、日本列島においてクマ類と人間との軋轢が頻発している。大型雑食動物であるクマ類は、人と接触した際に死亡事故や負傷事故など、重篤な被害を与えることもあり、直ちに対策を練る必要がある。なお、現在日本に生息するクマ類は本州・四国に生息するツキノワグマ（*Ursus thibetanus japonicus*）と北海道のヒグマ（*Ursus arctos yesoensis*）の 2 種類である。前者は体長 1.2 メートルほどであり、比較的小型のクマであるが、後者は雄の体調が約 2 メートルにもなり（北海道新聞社, 2019）、日本に生息する最大の陸生哺乳類でもある（佐藤, 2006 : 3）。なお、本研究では北海道をフィールドとするため、主にヒグマを「クマ問題」の対象種として扱う。

「クマ問題」はヒグマが生息する地域の住民にとって重要な問題である。なぜなら、上述したように、クマ類による被害は人身事故につながるからである。最近では、ヒグマと人間との軋轢の例として、札幌市、苫小牧市、帯広市などの市街地にヒグマが出没し、札幌市では負傷者もでている（朝日新聞, 2021 年 6 月 19 日）。そこで、これを防止するために、人間側の行動の制限や立ち入り禁止区域を設けることが多い。これは最終的に日常生活に支障をきたし、また、ヒグマへの恐怖心から精神的被害を引き起こすこともある（日本クマネットワーク, 2020）。以上のことから、北海道においてヒグマ対策は喫緊の課題であることがうかがえる¹。そこで、現在、多くの市町村はヒグマ対策として有害個体の捕獲及び駆除を行っている（亀田・丸山・前田, 2007）。

ところが、新たな問題が起きている。近年、ヒグマの駆除を行える人材が減少している（佐藤, 2019）。また、駆除後、同じ地域に他のヒグマが出没することが多く確認されてお

¹ 実際、北海道（2022a）は、「人とのあつれきが深刻化するなど新たな課題も顕在化してきており、出没の抑制から出没時の対応までの総合的な対策を一層強化していく必要がある（北海道, 2022b : 1）」とし、「北海道ヒグマ管理計画（第 2 期）」を策定している。

り、有害駆除に頼り切った対策が持続的ではないことが指摘されている（たとえば、亀田・丸山・前田, 2007）。

そこで、最近では問題行動をするクマを生み出さない、予防的な対策が注目されている（亀田・丸山・前田, 2007；豊島, 2020；早稲田, 2020）。具体的には、農作物、放棄果樹、ゴミの管理の徹底や下草刈りによる緩衝帯設置などがあげられる。このような未然防除は、対処療法よりも低コストであり、効果が高いという指摘もある（Krofel et al., 2021）。ただし、効果的な未然防除の結果を得るためには地域市民が主体となって地域ぐるみで対策を行っていく必要がある（亀田・丸山・前田, 2007）²。また、地域ぐるみの対策の実施には、各市町村の利害関係者同士の問題の共有と目標の設定に加えて、合意形成が不可欠である（鈴木, 2013；鈴木, 2017；山本・細田・伊藤, 2017）。しかし、人びとの野生動物問題に対する考え方は、過去の被害経験や居住区の地域性など、様々な要因によって形成されることから、同じ地区でも住民の考え方は多様であり、そのことは地域ぐるみで住民が同じ目標を共有し、一体となって対策を進めていくことをしばしば困難にする（桜井・江成・松田・丸山, 2014）。したがって、住民が主体となって対策を行えるような地域づくりを目指すうえで、まずは、その地域におけるヒグマとの関わりや現状や地域住民の多様な価値観を知ることが重要となってくる。

1-1-2 ヒグマ研究の変遷

では、「ヒグマ問題」を含めた野生動物問題に対して、どのような研究が行われてきたのかを概観したい。まず、野生動物管理や保護などを考えるうえで、対象動物に対する生態学的な研究が多く行われている。本研究の対象動物であるヒグマの場合、現在までに、1)身体的特徴や生活史、2)採食生態、3)行動圏、4)土地利用、5)個体群と遺伝的変異などについて研究が行われてきた（釣賀, 2011；北海道新聞, 2019；門崎, 2019；門崎, 2020；増田, 2020；佐藤, 2021）。

もちろん、以上のような生態学的な情報は、野生動物管理や保護を行っていくうえで必要不可欠である。ただし、野生動物問題は人や社会から切り離すことはできないため、より人や社会の側面から野生動物問題を考えていく必要がある。たとえば、「ヒグマ問題」の場合、ヒグマと人の軋轢は、果樹や畑作物、ゴミなどの誘因物、ヒグマが市街地に入り込みやすい地形や市街地周囲の環境管理不足など、人側の原因も大きい（佐藤, 2021:240）。

では、本研究の対象動物であるヒグマの場合、どのような社会科学的方法を用いた研究が行われてきたのだろうか。一例として、亀田正人などが厚沢部町・長万部町・渡

²ただし、地域ぐるみの対策を地域に押し付けてはいけない。閻（2017; 2019）は、集落ぐるみの獣害対策を行わない集落の存在を示し、それは地域住民の“合理性”に基づく判断によるものだという。「正しい」と言われている対策を地域住民に押し付けるのではなく、地域の実情を知り、尊重したうえで野生動物対策を考えていく必要があるだろう。

島半島で行った地域住民のヒグマに対する認識を測った研究がある（亀田・丸山, 2003 ; 亀田・丸山・前田, 2007）。さらに、近年の市街地へのヒグマの大量出没への危機感や関心の高まりもあり、2021年2月には無作為抽出型の市民会議であるミニ・パブリックスの手法を応用し、札幌市のヒグマ出没について話し合う「さっぽろヒグマ市民会議」が遠藤ら（2022）によって開催されるなど、地域住民に焦点を当てた研究も増えている。しかし、野生動物対策を行う上で重要であると言われている、地域におけるヒグマと人の関わりの現状や地域住民の多様な価値観については十分には明らかにされていない³。また、野生動物対策を進めていくうえで、地域住民の協力が必要不可欠であり、そのためには地域の実情を踏まえ地域の諸課題と結びつけた取り組みを考えていく必要があると言われている（鈴木, 2013 ; 佐藤, 2021）。以上をふまえ、今後は住民の多様なヒグマ認識や、地域の実情を明らかにしていく必要がある。

1-1-3 本研究の目的

そこで本研究では、特徴ある農村地域・漁村地域・市街地の3地域がある北海道浦幌町を事例地域とし、それぞれ地域住民のヒグマ認識や地域の現状、課題等を明らかにすることを目的とする。北海道の山間にある町である浦幌町に住む地域住民が、ヒグマをどのようにみているのか、ヒグマとどのように向き合っているのかを明らかにしたい。

また、地域住民のヒグマ観や地域の現状、課題等を明らかにすることにより、地域目線のヒグマ対策について議論する。ヒグマが住む山に近い場所で生活をする地域住民のヒグマ観や抱える課題を明らかにすることで、浦幌町のみならず、全道での地域目線のヒグマ対策の在り方を検討したい。

1-2 方法

本研究では、地域の方々の実際の生活やヒグマとの関わりを具体的に明らかにするため、聞き取り調査を中心に参与観察および文献調査などの質的調査を行った。浦幌町での滞在調査期間は2022年8月13日～9月1日、10月30日、2023年2月11日～2月17日、7月15日～8月6日、9月23日～9月27日の計5回57日間であった。聞き取り調査では、短時間の聞き取りも含め、上浦幌地域（農村地域）10名、市街地地域19名、厚内地域約8名の計約30名にお話を伺った（表1）。

³たとえば、亀田らによる研究では、各地域における地域住民のヒグマに対する思いや対策状況、行政に望む対策等がアンケート調査によって明らかにされている。一方で、アンケートを用いた調査のため、数では表すことのできない住民の多様なヒグマ観や、ヒグマへの思い、地域の実情は十分には明らかにされていない。

以下具体的な調査内容を記す。2022年8月13日～9月1日、2023年2月11日～2月17日、7月15日～8月6日の期間中は主に聞き取り調査を行った。聞き取り調査では、個人および複数人を対象に、各回1~2時間程度、各人のヒグマとの関わりやヒグマへの思いを中心として、日常生活などについて半構造化インタビューを実施した。また滞在中は、聞き取り調査に加え、地域の方々の生活をよりよく知るため、および地域の方々の信頼関係を築くため、地域活動にも積極的に参加をした。具体的には、厚内地域（漁村地域）で開催された地域住民向け公民館イベントや町内農業従事者農場でのブロッコリー収穫バイトへの複数回参加、上浦幌地域（農村地域）在住農業従事者の牛関連作業のお手伝い、浦幌町内お祭りやイベントへの参加、7月30日に浦幌の自然を楽しむ会および浦幌町立博物館共催で開催された、子供向け環境教育イベント「ウチダザリガニバスターズ」にスタッフとして参加、7月28日・29日に開催された、うらほろ森林公園の未来や、森林との関わり方について考える町民ワークショップ「夢の森ミーティング」への参加等である。

なお、10月30日は町内小学校にて町の博物館学芸員さんと共に総合学習授業の講師としてヒグマについてレクチャーをさせていただいた。9月23日～9月27日には、浦幌町内にて、まちづくり活動を行う一般社団法人十勝うらほろ楽舎主催の「アグリダイブ」へ参加し上浦幌地域の農業従事者と農作業を共に行い、交流をした。

調査地滞在期間中、以上の聞き取り調査や地域活動への参加を通して、町民のヒグマ観や日常生活について観察を行った。

なお、筆者は帯広畜産大学在学時の卒業論文として同じく浦幌町のヒグマと人の関係を扱っているため、自身の卒業論文も1つのデータとして適宜参照をした⁴。

⁴自身の卒業論文でも聞き取り調査を行っている。浦幌町内関係者としては、2021年8月6日～2021年12月1日にかけて、浦幌町立博物館学芸員持田誠氏、浦幌ヒグマ調査会代表、酪農学園大学佐藤喜和教授、猟師、浦幌駐在所警察官、当時浦幌町町長、当時浦幌町役場産業課林務係担当者、当時十勝総合振興局森林室森林室長、当時浦幌町森林組合代表の合計9名に聞き取り調査を行った。

表1 インタビュー一覧

<p>【上浦幌（農村地域）】 4軒+1名（10名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農家さんご家族①（肉牛/畑作/猟師） ・農家さんご家族②（畑作） ・農家さんご夫婦（畑作/猟師） ・農家さん（畑作/猟師） ・町役場事務勤務者 <p>計：約30名</p>	<p>【市街地】 19名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域おこし協力隊 ・町在住者 ・町役場職員 ・農家さん（畑作/直売経営） ・農家さん（畑作） <p>【厚内（漁村地域）】 約8名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町施設勤務者 ・厚内在住者（うち1名猟師兼業者）
--	---

1-3 調査地概要

1-3-1 はじめに

本研究では、北海道十勝郡浦幌町を事例地域とした。浦幌町を選んだ理由は以下の2点である。1. 20年以上ヒグマの生態調査を行う浦幌ヒグマ調査会があり、ヒグマ問題について考える際重要となる、地域周辺に生息するヒグマの生態学的な情報が手に入りやすいと考えたため。2. 町内に地域特性の異なる農村地域・市街地・漁村地域の3つの地域があり、それぞれの地域特性や地域に住む人びとのヒグマとの付き合い方やその違いを知ることができると考えたためである。

1-3-2 地理・歴史

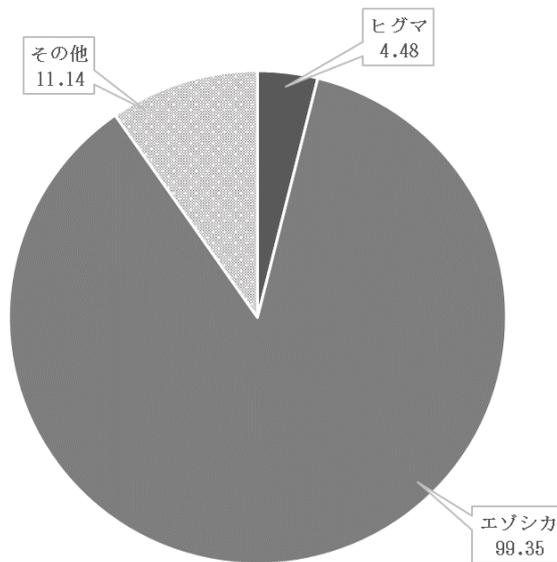
浦幌町は、十勝総合振興局（図1）の南東部に位置し、南は太平洋、東は釧路市・白糖町、北は本別町、西は豊頃町・池田町と境を接する町である（図2）。1954年（昭和29年）に町制施行によって1912年から続いていた村名（浦幌村）を現在の浦幌町に改称した。なお、町域は南北53.5キロメートル、東西25.7キロメートルと南北に狭長であり、全体面積は729.64平方キロメートルである。そして中央部を延長約87.2キロメートルの浦幌川が南流しており、その流域部及び下頃辺川や海岸部に平地が広がっている。一方、浦幌町のデータによると、2023年（令和5年）12月31日現在の人口は4195人であった（浦幌町）。

1-3-3 浦幌町のヒグマ

ここまで浦幌町の主な基礎情報を見てきたが、浦幌町のヒグマ問題はどの程度だろうか。浦幌町はヒグマの生息地である白糠丘陵に面しており、また畑作や酪農が盛んで農地が多いため、ヒグマの農地出没が発生している。浦幌町が策定した「鳥獣被害防止計画」によると、2020年度（令和2年度）のヒグマによる農作物被害面積は4.48ヘクタールであり、被害額は約2556万円であった。これは、エゾシカによる被害面積のおよそ14分の1、被害額のおよそ22分の1である（浦幌町、2021）。これを踏まえると、農業被害、金銭的被害の側面からは、ヒグマよりもエゾシカによる被害のほうが問題であることが分かる（図3、図4）。ただし、序章でも述べたように、ヒグマはエゾシカとは異なり、甚大な人身被害につながる可能性が高いことは留意しておきたい。

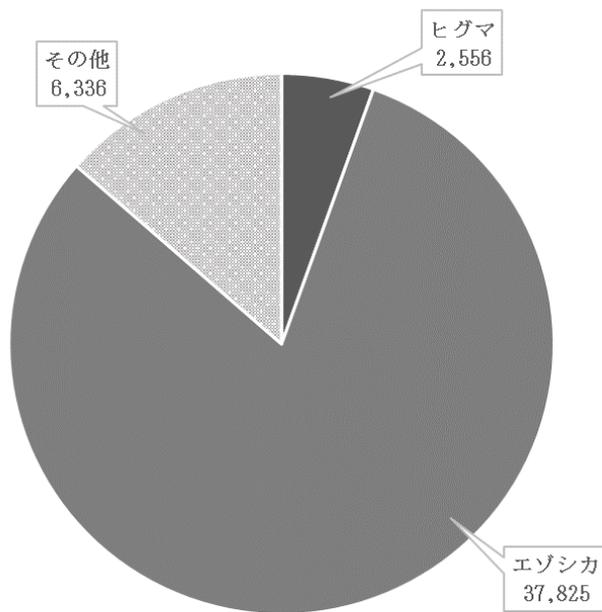
ここまで、浦幌町のヒグマについてみてきたが、浦幌町のヒグマについて語るうえで欠かせない団体である「浦幌ヒグマ調査会」について言及しておく。浦幌ヒグマ調査会は1998年に設立した団体である。その最終目的は浦幌町における人間とヒグマの共生をはかることであり、そのために必要な活動・調査・検討および情報交換を行っている（浦幌ヒグマ調査会 Facebook）。なお、浦幌ヒグマ調査会を設立したのは現在、酪農学園大学の教授である佐藤喜和氏である⁵。また、浦幌ヒグマ調査会は、主に佐藤教授の研究室メンバーやそのOB・OGで構成されている。加えて、少数ではあるが、浦幌町立博物館学芸員や元役場職員など町内の地域住民もメンバーとなっている。

⁵佐藤教授は1998年から5年間、浦幌町に住み込みで、エゾシカの増加がヒグマに与える影響、そしてヒグマによる農業被害の問題を調査した。その過程で、ヒグマの生態研究だけではなく、被害対策や普及啓発を行っていきたいと考えた。同時に研究や被害対策、また普及啓発を行うための資金集めを行いたいと思い、現在の浦幌ヒグマ調査会の設立に至った（帯広畜産大学卒業研究時に実施した2021年9月3日の佐藤喜和教授へのインタビューより）。実際に、調査会設立初期から現在まで継続して、浦幌町立博物館との共同で、家族連れや幼稚園生をターゲットにした「ヒグマの学校」や、浦幌でのヒグマ研究の成果を発表する卒業論文大発表会「浦幌のヒグマこんなに調べました！」などの普及啓発を毎年行ってきた。2020年からの2、3年はコロナウイルスの影響により、各イベントの開催ができていなかったが、卒業論文発表会「浦幌のヒグマこんなに調べました！」に関しては、2022年度より再開し、（浦幌町立博物館ホームページ『卒業論文大発表会「浦幌のヒグマこんなに調べました2023」』）筆者も卒業論文内容について発表を行っている。浦幌町にお伺いし各人に聞き取りをお願いした際、特に年配の農業従事者から高確率で「クマ研か？」と尋ねられた。また聞き取り内容にも佐藤教授の名前が出てくるのが幾度かあった。佐藤教授とのやり取りの中で、クマやクマ捕獲に対する考え方が変わったとお話をされる農業従事者もおり、「浦幌ヒグマ調査会」が少なからず地域に影響を与えていることがうかがえる。



出典：「浦幌町鳥獣被害防止計画」（2021年）より筆者作成

図3 浦幌町農作物被害面積（2020年度）(ha)



出典：「浦幌町鳥獣被害防止計画」（2021年）より筆者作成

図4 浦幌町農作物被害面積（2020年度）(千円)

1-4 本稿の構成

本稿は、4章で構成されている。

まず、第1章では、研究の背景や目的、手法及び調査地について整理し、浦幌町でヒグマと人の関わりの聞き取り調査を行う意義や視点を明らかにする。

次に、第2章では、浦幌町内の非農業従事者および農業従事者のヒグマ認識、ヒグマと人の関わりについて、聞き取り調査結果をもとに考察する。

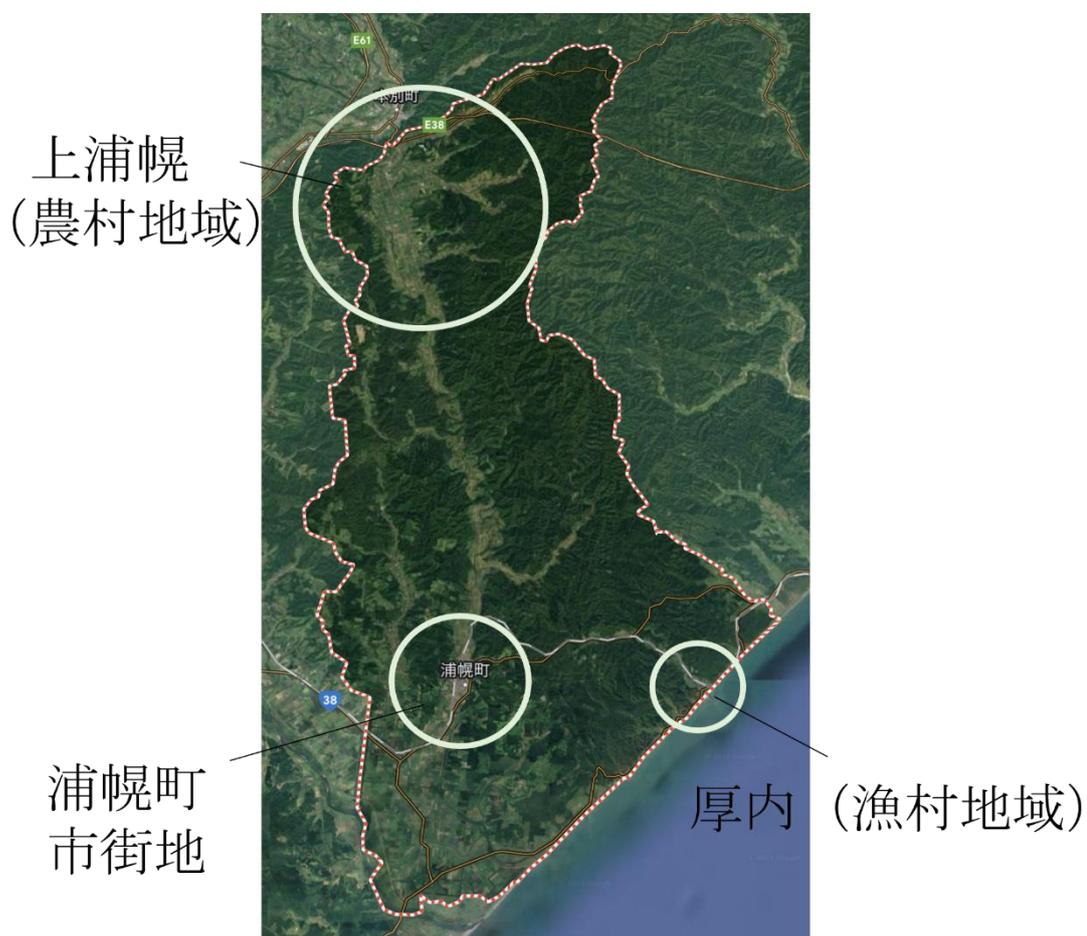
そして、第3章では、聞き取り調査の結果および筆者のフィールド調査での経験をもとに、地域社会目線のヒグマ対策のありかたについて議論する。

最後に、第4章では、本稿のまとめとして、本研究を踏まえた今後のヒグマ管理および対策のありかたについて検討する。

2 浦幌町の地域住民とヒグマの関係

2-1 はじめに

本研究では、上述した調査地である浦幌町内各地域を、地域特性を踏まえ「農村地域」「市街地」「漁村地域」の3つの地域に分類（図5）し、地域ごとに聞き取りを行った。本稿では、聞き取りの内容に基づき、ヒグマに対する認識に違いがみられた「非農業従事者」と「農業従事者」に調査対象者を分類し、浦幌町内の人びととヒグマの関係を明らかにする。



出典：Google Map を元に筆者作成

図5 浦幌町各地域地図

2-2 非農業従事者によるヒグマ認識

2-2-1 聞き取り対象および地域概要について

まず、町内中心部にある浦幌町市街地（図 6）に多く在住する、非農業従事者がヒグマについてどのように見ているか、見てみたい。市街地は浦幌町の人口集積地であるが、四方を山に囲まれている。一方で、ヒグマの出没や目撃はほとんどない地域である。

なお、浦幌町は、「うらほろスタイル教育」と呼ばれる地域教育の振興や、移住者の積極的な誘致など、地域づくりや地域おこしにも力を入れている町でもある。特に市街地ではその取り組みが活発であり、町内では移住者も多い地域である。



出典：Google Map を元に筆者作成

図 6 浦幌町市街地地図

2-2-2 「身近なようで身近じゃない」ヒグマ

浦幌町市街地に住む多くの人びとが「クマがいるのは当たり前だと思っている」と語る。幼少期から浦幌町の市街地に住む 40 代女性の A さんも「クマがいることは当たり前」という。一方で、ヒグマはテレビでしか見たことがなく、クマは「身近なようで身近じゃない⁶」と語る。

なんか変な話、あんまり実感がないんだよね。まあ山がすぐそこだから出てもおかしくはないんだろうけど。出てきてもおかしくないぐらい山はすぐそばにあるなとも思うんだけど。出て来たことがないから。(ヒグマが⁷) 用心深いのか⁸。

このように A さんは、町の周りは山に囲まれているためヒグマは出てきてもおかしくはないとは思いますが、実際にはヒグマの出没を見たことがないため、ヒグマの存在に実感を持たずにいるという。このことは、他に聞き取りをした市街地在住の人びとも同じ意見であり、ヒグマは「お化けみたいな存在」とであると筆者に語った人もいた。

2-2-3 ヒグマへのいたわりの感情

では、そんな「身近なようで身近じゃない」ヒグマに対して、市街地在住者はどのような感情を抱いているのだろうか。たとえば、A さんは、

私の感覚では、ヒグマはおっかないし、出てきたら大変だと思うけど、やっぱり出てきて撃たれたら可哀そうだなっていう気持ちは、出てこなきゃいいのにねっていう気持ちはあります。出てきたら撃たなきゃなくなるから、出てこなきゃいいのになあって⁹。

と、ヒグマが撃たれるのはかわいそうであると、ヒグマへの同情の思いを語る。一方で、

これで多分自分が農家とかっていうんなら、きっとまた見方が違うんでしょうけどね。やっぱり街の中に住んでて、自分で関わらないから実感がないったら変だけど。いて当たり前のものだから¹⁰。

⁶ A さんへの聞き取り（2022年9月1日）より

⁷ 内容が分かりやすいように筆者が追記した。(以下、同じ)

⁸ A さんへの聞き取り（2022年9月1日）より

⁹ A さんへの聞き取り（2022年9月1日）より

¹⁰ A さんへの聞き取り（2022年9月1日）より

と自分自身がヒグマに関わらないからこそそのヒグマへの感情かもしれないと、自身の意見が、農業従事者とは異なる可能性もあると話す。

また、幼少期は浦幌町の農村地域で育ち、現在は市街地に住み町立図書館で司書として働く女性 B さんは、「クマはみんな恐ろしいものです¹¹」とクマ¹²は基本的には恐れるものであると話しつつ、

私はあんまり山に入るっていう機会は、そんなにはないんですけど。やっぱり認識として、山にはクマがいるし、1 番いいのは、山のテリトリーの中で全てクマが完結っていうか、生活が完結するのが 1 番いいことだよなっていうことですよね。食料環境とか、自然環境とか、っていう認識は持ってます。[中略] 町に降りてこないためにはどうしたらいいかって言ったら、やっぱり環境保護とか、あと、生ゴミ類とかは山に捨てないとか、そういう環境保全ですよ。そういう認識は大事だとは思っています¹³。

と、クマが住みやすい環境づくりや、クマの生息地と人の生活圏との間に境界線を引くことの大切さを語る。

以上のように、ヒグマによる実質的な被害を受けた経験の無い、市街地に暮らす住民からは、人とクマの関係性を語る際、クマをいたわり、共存を考えているような発言があった¹⁴。

2-2-4 伝聞から知るヒグマ

では、ヒグマと直接会う機会の少ない市街地に住む人びとのこのようなヒグマ観はどのように形成されているのだろうか。市街地在住者に対してヒグマについて聞いた際、誰々からこういう話を聞いた、誰々がヒグマに会ったらしい、など、身近な人から聞いた情報を話す人も多くいた。

たとえば、町立図書館職員の男性 C さんは

¹¹ B さんへの聞き取り（2022 年 8 月 28 日）より

¹² この時 B さんは、ヒグマのみならず本州に生息するツキノワグマについても言及をされていた。

¹³ B さんへの聞き取り（2022 年 8 月 28 日）より

¹⁴ 実際には、「クマはいなくなってほしい」と語る方も浦幌町内にはいた。しかし、農業従事者を含め、筆者がお話を聞いてきた 30 名以上のうち 2 名のみであり、全体的には少数派であると考えられる。ちなみに、「クマはいなくなってほしい」と発言をされたのは、漁村地域で飲食店を営む高齢女性と、数年前に北海道の他地域から移住をし、酪農などを経て現在は海岸線付近で畑作を行う若手男性農家であった。

農家の人にしてみればやっぱり、畑のね、作物をね、被害にあうっちゃうのはね、やっぱしね。ま、滅多にね、クマが畑のもの、全部食べ尽くすってことはないかもしれないけど。しかしながらね、ビート畑に入ってね、ビートの一部をさ、食べていくってこと。そういうことは、なんかその、してみれば、とりあえず、なんとかね、そういう被害をさ、抑えたいっていう気持ちはあるだろう¹⁵。

とヒグマによる農作物被害に対する農家の気持ちを思いつつ、20年ほど前に農家から聞いた話として以下のお話を笑い交じりに語ってくれた。

これ、笑い話なんだけどね。農家の人から聞いたんだけどね。いや、この間、うちのビート畑にクマ入ってきてて、ビート一生懸命食べてたと。して見てたら、クマがこう、ビートをね、両手で抱えて、こう持って、そして2本足で立って逃げたって。ほんとにどうかわかんないですよ。2足歩行で逃げたって¹⁶。

このお話からは、農業従事者でさえもヒグマによる農作物被害に対して、どこか面白おかしく捉え、面白い話題としてLさんに対して語られていることが分かる。鈴木克哉(2008)によると、野生動物による被害経験の地域内伝達によって、地域社会における被害認識の先鋭化が生じるという事例がある。しかし、浦幌町ではこの先鋭化はあまりみられず、ヒグマとの遭遇や被害のエピソードは面白おかしく、時には武勇伝のように語られることが多くみられた。これは、ヒグマという動物の、エゾシカと比較した被害量の少なさや、非日常感といった特性が影響しているものだと推測される。

また、Aさんは、

Aさん：最近クマね、クマ鈴持って歩いてたら、ご飯来たと思って寄ってくるクマもいるって聞いたことあるから。[中略]クマ鈴付けて山入るとリュックしょってるから、リュックにそれ美味しいもんだと詰まってるって分かって学習したクマは、寄ってくるって話はなんかちらっと聞いた。

筆者：そういった話はどこから聞くんですか？

Aさん：それどっから聞いたんだったかな。あれ。誰から聞いたんだらう私。(浦幌町立博物館学芸員の)持田さんかな。テレビかな。うーん、テレビかな。なんか観光客がこう、襲われてリュック投げて逃げたとかっていう、テレビだったかな。持田さんだったような気がするけど。[中略]持田さんはちなみにクマ鈴つけて歩かないって言ってました¹⁷。

¹⁵ Cさんへの聞き取り(2022年8月28日)より

¹⁶ Cさんへの聞き取り(2022年8月28日)より

¹⁷ Aさんへの聞き取り(2022年9月1日)より

と、ヒグマの生態やそれに関連した対策方法について、町立博物館学芸員さんもしくはテレビから得た情報だとして話してくれた。このように、市街地住民にとっての「身近だけど身近ではない」ヒグマ像は、周囲の人からの伝聞やメディアによる情報発信から形成されていると考えられる。以上より、周囲の人やメディアによる情報は、普段ヒグマと密接に関わることない市街地住民のヒグマ認識に大きな影響を与える可能性があることが分かる。最近では、クマ類の出没の増加により、ヒグマを含めたクマ類に関する報道も多くみられる。そのため、人びとのヒグマ認識やヒグマ問題への考え方が、ヒグマ対策にも影響を与える（桜井・江成・松田・丸山, 2014）ことを考慮したメディア発信を心がける必要があるだろう。

2-2-5 まとめ

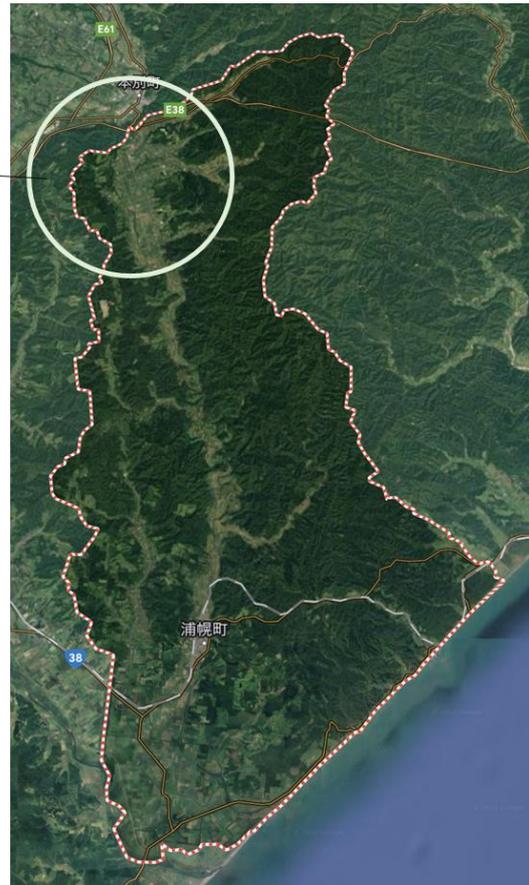
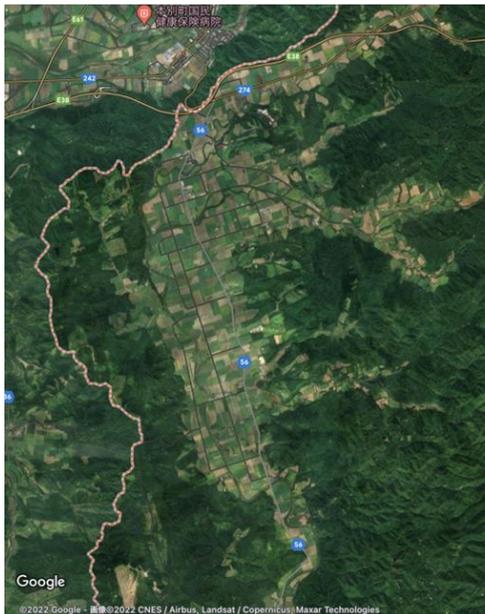
以上本節では、浦幌町市街地に多く在住する、非農業従事者のヒグマ認識についてみてきた。市街地在住の非農業従事者にとってヒグマは、山には当たり前にいる存在であるが日頃出会う機会はほとんど無いため、「身近だけど身近ではない」「お化けのような」存在であることが分かった。また、人里や農地に出没し駆除をされるヒグマに対して同情の思いや、ヒグマの生息環境を懸念するような、ヒグマに対するいたわりの感情を持つ人もいた。これは、周囲の人やメディアによる情報が影響を与えていると考えられる。

2-3 農業従事者によるヒグマ認識

2-3-1 聞き取り対象および対象地域について

次に、農業従事者によるヒグマ認識をみてみる。農業従事者は、主に浦幌町内北部の上浦幌地域と呼ばれる農村地域（図 7）に住んでいる人が多いが、市街地周辺や南部で農業を行っている人もいる。本稿では、主にヒグマによる農作物被害が発生している上浦幌地域の農業従事者および市街地周辺地域の農業従事者に焦点をあてる。

上浦幌（農村地域）



出典：Google Map を元に筆者作成

図7 浦幌町 農村地域地図

2-3-2 身近な話題としてのヒグマ

前節で議論した、市街地に住み農業を行わない非農業従事者の人びとは、「日頃ヒグマの話をする事はない」ということであった。しかし、同じ市街地付近在住であっても農業を行う男性Dさん¹⁸は、

地域近い人、帯富地区だけじゃなくて、その隣の常豊とか、常室とか、円山とか、まあ、若いメンバーと飲んだりとかね、焼肉した時にうち出たわとか、ほんとにさ、近かったら、近くの人に、今出たっていうか、やられてたわとか、どう？とかって聞いたりとかして¹⁹。

¹⁸ Dさんは市街地近くの地域である帯富地区で畑作をしている農業従事者である。

¹⁹ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

と農業仲間との気軽な話題としてヒグマの話題が出ると語る。このことから、ヒグマの「身近に感じ方」の違いは、市街地と農村地域という住んでいる地域の違いではなく、職業などヒグマとの関わり方の違いによる可能性が高いと考えられる。実際、Dさんは、就農後、ヒグマを3回見たと言い、「ほんと、農家始めるまでは、クマいるのは分かってても、そんな目の前で見るとはね、思っただけじゃなかったから」と語る²⁰。さらに、市街地在住の非農業従事者がヒグマに対して「お化けみたい」という感情を抱いていることを話すと、「やっぱ自分もね、町に住んでた時は、そんなね。実家もね、裏山しょってるけど。自分ちのね、裏、山なんだけど。シカはきててもクマは来ないでな（来ないからな）、とかって思いながらも、いい匂い、焼肉の匂い、流れたら（ヒグマも）来んのかなとか思いながら²¹」と農家になる前にはヒグマが身近にいることは知りつつ、そこまで意識をすることは無かったと話す。市街地に暮らしていた幼少期のDさんのヒグマとの距離感やヒグマ観がどのようなものであったか、以下の会話からも同様にうかがえる。

筆者：クマは、昔から身近ではありましたか？

Dさん：身近、だね。そうだね。まあ、いるのは、うん。だから、やっぱり、高校の競歩大会、浦幌はマラソン大会じゃなくて、競歩大会だったんだけど。そのルートが、神社の裏を通過して、施設内回って帰ってくるっていうルートだったんだけど、前日に神社の裏のところで、クマが出たって言って、でハンターが撃つたりとか。ま、一応、姿は見てないっていう体でやったけど。あとは、ね、ちっちゃい頃、森林公園のアスレチックが山にこうずらっとあって、山に休憩小屋が何箇所もあるんだけど、そこに爪痕とか普通にあったから。

筆者：じゃあ、ほんとに身近にいるんだなっていうのは感じながら幼少期を過ごす？

Dさん：けど、意識はそこまでしていないかな²²。

以上のように、市街地に住み農業にたずさわる前では、ヒグマは身近にいることを実感しながらも、それは当たり前のこととして意識をすることはなかったとDさんは語る。これは、前項で述べた、市街地在住の一般住民の方々の「身近なようで身近じゃない」ヒグマ像と重なる。

さらに、農村地域の農家であるEさんも「立ち話程度」に、他の農家とクマの話をする

筆者：クマの出没とかについて、周りの農家さんと共有とかはされているんですか。

²⁰ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

²¹ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

²² Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

Eさん：しますね。ま、立ち話程度には行ったぞとか、そんな感じですけど。クマの話は、やっぱ、出ますよね。〔中略〕クマあそこに来てるみたいだな、みたいな。でも、罨には入らないなって。で、大体、結構行き来するんでね、クマってね。結構それなりに。あっちの、今ここら辺にいるんじゃないかとか、そういう話をしますね。クマ入るかもしれんぞーみたいな²³。

以上より、農業従事者間では、ヒグマは日常的な話題として語られていることが分かる。生業として農作業を行う農業従事者にとって、ヒグマは自身の生活に直接かかわる、ある意味で身近な存在であることが分かる。

2-3-3 身近な恐怖対象としてのヒグマ

前項では、農業従事者にとって、日常的な話題としてあがるほどヒグマは身近な存在であることが分かった。では実際、農業従事者はヒグマに対してどのような印象をいただいているのだろうか。Eさんは筆者の「クマ特有の被害や恐怖感情はありますか。」という問いに対して、以下のように答えた。

ありますね。ありますあります。全然あの、やっぱり、どうしても山間で、あの一、ま、そんな人もいる集落でもないから、あの一、草取りとかね、畑に入って、ちょっと、やっぱりね、周りは気にしますよね。やっぱりでも、クマがいるんじゃないかって思いながら。だから、そういう時は、やっぱり人数、ある程度送ったり²⁴とか、なんか、そういうケアはやっぱした中で、仕事をしてもらったりしてますね。怖いっすよね、クマいるかもしんないっていうのはね²⁵。

上記 Eさんの語りから、山間で農業を行う農業従事者にとってヒグマは、いつ出会ってもおかしくなく、恐怖という感情を含め、日々気になる存在であることが分かる。また、Fさんの

鹿はね、もう慣れちゃったから、そんなに恐怖っていう風には思わない。あちらからこう、襲ってくるってことはないの。ただ、クマだけは、クマはやっぱりおっかない。っていうイメージは持ってる。うちらもあの畑に出てるんで、うちの家族には、あの、やっぱり草取りなんかのときには、今ちょっと出てるから、草はひどいけど、行くなど。とりあえず。あの一、なんだろうね。やっぱり万が一の

²³ Eさんへの聞き取り（2023年8月4日）より

²⁴ Eさんは農繁期にはアルバイトを雇っている。

²⁵ Eさんへの聞き取り（2023年8月4日）より

があるから。一人ではまず行くなと。で、気を付けてはいても、やっぱり真後ろから来られたりすると、やっぱりわかんないんでね。どうしても。そういう部分じゃ、やっぱり襲われるって感覚でいけば、やっぱりシカよりクマの方が絶対おっかない²⁶。

という語りからも、恐怖という感情は、シカにはないヒグマに対する特有の感情であることが分かる。

さらに、農家 G さんのパートナーであり同じく農作業を行う女性 H さんは日中でもヒグマは「気になる²⁷」という。またヒグマは「やっぱり怖いよね²⁸」とお話されたため、筆者が「クマはいなくなっしてほしいですか？」と問いかけると H さん、

あ、それはなんかすごいあの、まあ、ここにいるんだから仕方ないんだけど、あの、怖いと思うような気持ちにならずに、仕事を朝から晩までしたいよね。〔中略〕だから、もうこう、(ヒグマが出なさそうな) いいところを先にこうやってって、(ヒグマが出そうな) 嫌なとこ残っちゃったみたいなの。でも、行こうかっていう。あ、まあ、もちろん (H さんの息子さんの) お嫁さんも 1 人で、あの、その畑に行きなさい。行きなさいっていうかね、行くって言うてもダメだよって言うし、私も反対に言われるし。どうなるかなって思うときもあるけど、それこそ本当に対策をして、花火鳴らすなり。ポケットにいれて、午前中の間だけでも 5、6 発ね。うん、たたたとならして²⁹。

と語る。H さんの「ここにいるんだから仕方ないんだけど、〔中略〕怖いと思うような気持ちにならずに、仕事を朝から晩までしたいよね」という言葉からは、ヒグマの存在が日々の精神的な負担となっているが、ヒグマの存在を否定する気持ちは無いことがうかがえる。

以上の農業従事者によるヒグマについての語りからは、恐怖感情を伴うヒグマを身近な存在として受け入れつつも、農地での活動を行う際には、常にヒグマの存在を意識し、人としてできる対策を行い日々を過ごしていることが分かる³⁰。このことは、なぜヒグマの話題が身近な話題として農業従事者間でとりあげられるのか、という前項の議論の一つの回答にもなるだろう。

²⁶ F さんへの聞き取り (2023 年 7 月 27 日) より

²⁷ H さんへの聞き取り (2023 年 7 月 26 日) より

²⁸ H さんへの聞き取り (2023 年 7 月 26 日) より

²⁹ H さんへの聞き取り (2023 年 7 月 26 日) より

³⁰ このことは、調査地滞在中の観察からもうかがえた。たとえば、猟師としても活動している農家 I さんの畑と一緒に周らしていただいた際、車から降りて畑を歩く時には、I さんは常にヒグマを意識し、異変が無いかを確認していた。

2-3-4 ヒグマによる農作物被害の現状と対策

では、ヒグマによる農作物被害等は実際どのようなものなのだろうか。調査地の滞在中、筆者は、4名の農業従事者の畑を共に回らせていただいたが、どの人も実際の作物被害の現場と共に、ヒグマを含めた野生動物対策の試行錯誤の現場を見せてくれた。農作物被害の現状については、もちろんヒグマによる農作物被害はあるが、前述したようにやはりシカによる農作物被害が大きいようである。農村地域で農業を営む男性 E さんは、「まあ、なんだかんだ、やっぱ、シカですよ、シカ」「クマよりシカです。シカですね」と語る³¹。その理由として、「もう、クマは大してそこまで、だいたいそんな集団でいることないし、クマはね。シカは集団で行くと、10頭、20頭なんていたりとかもしてね、荒らされちゃうんで」と語る³²。

一方で、ヒグマ特有の被害もある。E さんは、

（ヒグマは）ただまあ、食い出したらね、やっぱずっと執着するから。ビートとかも、あつという間に、なんぼも面積、1回食って終わりじゃないですからね。毎日食うから。そしたら、やっぱりね、あの、食われちゃうんでね。作物さなくなっ
てっちゃうから³³。

とヒグマは何度も畑に作物を食べにくると語る。このことに関連して、「クマは執着する」という話を多くの農業従事者から聞いた。また複数の農業従事者が「クマは時期になると各畑を味見して周り、美味しい場所を探して戻ってくる³⁴」と語った。さらに、ヒグマは賢く学習能力が高いため、対策に手を焼くという。たとえば E さんは、柵などで対野生動物の侵入対策をしても、野生動物は侵入し、イタチごっごの日々だという。

筆者：対策をしても（野生動物が）入ってくるのですか？

E さん：入ってきますね。どっちにしろ、やっぱり倒木だったりとか、どうしてもあつたりとか、その隙間から入ってきたりとか、あとクマも、よじ登って、網をよじ登ってきちゃったら、今度そこ下がちやったりするんで、網が。そこを今度シカが飛び越えて。またクマだったら、掘ったり、網の下を掘ったりして、すごい隙間這って入ってくるんですけど、そこ、今度シカが入ってきてみたいな。

³¹ E さんへの聞き取り（2023年8月4日）より

³² なお、農村地域で農業を営む別の農業従事者 F さんによると、シカによる被害として、農作物被害とは別に、除草剤を撒き土壌処理をした土壌の処理層を、シカの農場侵入によって削られてしまう被害もあるという。

³³ E さんへの聞き取り（2023年8月4日）より

³⁴ D さん（2023年8月1日）、I さん（2022年8月18日）への聞き取りより

だからそれをイタチごっこっていうか、もう探して、また防いでみたいな。そんな感じですね³⁵。

また、市街地付近で農業を行う男性 D さんも特にクマの対策は難しいと話す。

クマ自体はどこでもね、入ってきちゃうんだよね。シカはシカ網あれば入ってこれなかったりするけど、クマはよじ登ってどこでも行けちゃうから。まあ、難しいとこだよね。防ぎよう、柵的なもので物理的にはね、防ぎようはなかなか難しいかなと思いますけどね³⁶。

以上のように日々発生する野生動物による農作物被害に対して、農業従事者は野生動物をよく観察し、試行錯誤をしながら野生動物と向き合っている。そのような試行錯誤について、自身も山の中に畑を持ち、日々クマ対策にいそしむ I さんは、「クマとの知恵比べだね³⁷」と話す。

一方で、農業従事者に対してヒグマによる農作物被害について聞き取りを行った際、よく聞いたのは「自分たちは山の中で農業をしているから、多少の被害は仕方がない」という言葉だった。同じく、「ま、この山に住んでたらクマはしゃあねえわなあ³⁸」と G さんからポツリとつぶやかれた言葉や、前項でも取り上げた H さんの、「まあ、ここにいるんだから仕方ないんだけど」という言葉からも、ヒグマによる農作物被害や農地出沒をある程度許容していることがうかがえる。

以上の農業従事者による語りからは、農業従事者はヒグマによる作物被害を受けながらも、ヒグマの存在を受け入れ、自分たちに出来る範囲でヒグマと向き合い生活し農業を営むことが分かる。山に囲まれた地域で農業を営むものとして、自然の中で共に生活をする一つの存在として、クマの存在や被害はある一定程度受け入れ、自然やヒグマと向き合っ試行錯誤をしながら暮らしているといえるだろう。

なお、上述したような、農家個人での野生動物対策の他に、国の農地・水保全管理支払交付金³⁹を利用した野生動物対策や農地周辺の草刈りなど、農家共同での農地周辺管理を

³⁵ E さんへの聞き取り（2023 年 8 月 4 日）より

³⁶ D さんへの聞き取り（2023 年 8 月 1 日）より

³⁷ I さんへの聞き取り（2022 年 9 月 1 日）より

³⁸ G さんへの聞き取り（2023 年 7 月 26 日）より

³⁹ 「農地・水保全管理支払交付金」とは、農林水産省による取り組みであり、(1) 共同活動支援交付金および (2) 向上活動支援交付金から構成される。なおこの交付金は、集落等の比較的小規模な単位で、個人の農業者に加え、地域住民、自治会、関係団体などの多様な主体が参画する組織が (1) 農地、水路等の基礎的な保全管理活動、農村環境の保全のための活動、(2) 施設の長寿命化のための活動、高度な農地・水の保全活動、農地・水・環境保全組織の取組などに対して交付される（農林水産省）。

行っている地域も多い。たとえば、Dさんの地域では、シカ柵の管理や修繕を協力して行うという。

あのね、地域ごとに環境保全会っていう団体があって、それで、シカ柵の管理、見回りとか修繕とか、あの、穴開いたりとかしたところを直したりとかはね、年に2回か3回やるかな⁴⁰。

一方で、地域によっては、少子高齢化などの現状から地域単位での防除や活動を行わない選択をしている地域もある。

筆者：農地環境保全金を活用して地域の人たちみんなで柵張ったり、草刈ったりしていると（他の農家さんから）お聞きしたのですが。

Eさん：そうそうみんなやってる。国から降りるやつね。でも、ここの恩根内っていう地域だけやってないんだよね。自分たちで直すわって言って、今やってないんだよね。手続きだったり、なんか、そういうのが、すごく。少ないんでね、人数も。だから、ちょっと難しいんじゃないかってことで、お金もらうようにはしてないんです。自分たちで直すっていうかたちで⁴¹。

このように、Eさんが農業を行う恩根内地域では、人手不足を理由に農家共同の活動は行っていない。

以上の農業従事者の語りからは、個人での対策か共同での対策かという選択を含めて、地域の実情に基づいて自分たちに必要な対策を検討し実施していることが分かる。農業を生業とする農業従事者にとって、野生動物対策は生活をするために必要不可欠なものであるため、日常的なものとして、自身や所属する地域社会に適した対策が行われていることが分かる。

2-3-5 「自分の土地は自分で守る」

前項では、農家共同での野生動物対策の事例の存在を紹介したが、基本的には「自分の土地は自分で守る」必要があると話す農業従事者が多い。このことは、野生動物捕獲において重要な割合を占める猟銃をめぐる農家の発言からもよく分かる。はじめに、農村地域で農業を行い、自身も猟銃を所有する農家であるEさんの語りを紹介したい。ちなみに、浦幌町内には上浦幌猟友会と浦幌猟友会2つの猟友会があり、前者は上浦幌地域（農村地域）で活動し、後者は市街地周辺を含め、主に農村地域よりも下の地域で主に活動をして

⁴⁰ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

⁴¹ Eさんへの聞き取り（2023年8月4日）より

いる。そのため、上浦幌猟友会の構成員は主に農業従事者であり、自身の畑を守るために猟銃を持ち始めた人が多いという⁴²。実際に、狩猟免許を取ろうと思ったきっかけについてEさんは、

まあ、誘われたのもあるけど、やっぱり将来的にね、地元の猟友会の方も高齢なんでね。ある程度、やっぱり自分の畑を守るためにっていうんで、とった方がいいんじゃないかってことで、先輩から。でとったんですよ⁴³。

と「自分の畑を守るために」猟銃免許を取得したと語る。しかし、Eさんによると、農村地域である上浦幌地域内での猟銃所有率は1割程度であり、猟銃を持ちたくない人も多いという。

筆者：上浦幌（農村地域）では、畑持ってるなら猟銃取るみたいな流れはあるのですか？

Eさん：あーと、誘わないと取らないかな、それでも。あんまり猟銃を持ちたくない人の方が多いかもしれない。やっぱりね、今あんま、若い人もそんなとろうという意欲はないです。〔中略〕ま、銃はね、なかなかね、扱いも、お金もかかるし。今、ちょうど、あの、ウクライナの関係で、あの、鉄砲の弾が入ってこなくて。で、しかも高いんです。一頃より倍ぐらいしちゃうから、なかなかね、あの、経費もかかるし、うん、ま、銃の、なんか、事件とかもあったりしてね、やっぱり、そういうのも、家族の理解も得なくちゃいけないから。多分、あんま持ちたがる人があんまりいないなってとこですね。でも、いいだけ（農作物）食われているんですけどね（笑）⁴⁴。

と、弾の価格や家族の理解など、様々な理由から猟銃を持ちたくない人が多いという。では、猟銃を持っていない農業従事者は野生動物の出没時にどのように対応をするのだろうか。筆者の、「猟銃を持っていない農家さんは、持っている方をお願いをするのですか」という問いに対して、Eさんは、

あー、それはいたぞ情報ぐらいですね。あそこにいたぞぐらいしか言わないですね。多分、あの、持ってない人もわかってるんですね。ま、あの、撃ってくれやっって言ったら、いや、お前銃取って自分で獲ればいべやっって言われるの分かってるから。いたぞ情報はくれるんですけど。だけど、まあ、積極的に、いや、うちの畑に

⁴² Jさんへの聞き取り（2022年8月18日）より

⁴³ Eさんへの聞き取り（2023年8月4日）より

⁴⁴ Eさんへの聞き取り（2023年8月4日）より

入って困ってるからちょっと撃ってくれやっていうのは言わないです。いるぞぐらいしか言わないです。そこはなんかね、あるんすよね、そういうの。いや、俺らでもそう思いますよね。自分の畑守るに必死なのに、人の畑を出てる、シカもわざわざね、頼まれて撃ちに行くってのはね。〔中略〕あ、まあでもほんとに困ってるんだったら、とってね、ある程度ね、罾でもいいし、銃でもいいし、とって、なんかね、自分で対策したらいいのになって思いますけどね。ライフルだってやっぱ10年かかるから⁴⁵⁴⁶。

と、猟銃を持っていない人も本当は、猟銃免許を取得するなど、自分自身で対応するのが基本であると思っているからこそ、積極的に野生動物駆除のお願いをしてこないという。では、猟銃免許取得に向けた補助制度などがあれば、農家の狩猟免許取得を促すことが可能なのだろうか。Eさんは筆者の「制度とか補助とかあったら、(狩猟免許)取る人増えたりしそうな感じですか」という問いに対して、

いや、ないな。ないな。ないなつつうか、ほんと、困らないととらんでね。ま、なんとなく、地域に1人か2人はいるんです。どの地域にも。銃持ってる方は。その人が、まー、なんだかんだ取るんです、結局は。言われなくても、やっぱ畑に出てたら、あの人困ってるかなとか、なんかね、分かるし。だから、取りに行ったりとか、撃ちに行ったりとかするから。そういうのに、ちょっと甘えてる部分もあるのかもしれないし、そういう人(シカやクマを撃ってくれる人)はね、だんだんいなく、もう高齢なんで、皆さんね、そういう方たちがいなくなった時にどうするか⁴⁷⁴⁸。

と、現状では、猟銃所有者が非所有者に協力をしているという。実際に、Eさんも、筆者の「Eさんも、他の方の畑に行って獲ってあげたりとかはしますか」という問いに対して、「まあ、見回りして、ついでに自分のとこ以外に行って、みたいな感じで、いるなら、と

⁴⁵ ヒグマを仕留める際には、主にライフル銃が使用される。ライフル銃を取得するためにはショットガンを10年以上所持して初めて、所持許可を受けることができる(環境省)。筆者がヒグマについての聞き取り調査を行っていたことから、ヒグマを仕留めるためには狩猟免許取得後から10年以上かかることを示唆していると考えられる。

⁴⁶ Eさんへの聞き取り(2023年8月4日)より

⁴⁷ Eさんは聞き取り中、たびたび野生動物対策に関して、高齢化による影響の心配を口にされていた。たとえばEさんは、筆者の「クマ対策や捕獲体制で課題で感じますか」という問いに対しても、「今やってる中では、やっぱ高齢化だから、みんな年齢が上がってきちゃってるから、今後それが引き継いでいくのが不安ですね」と回答をされた。本稿では深く議論ができないが、地域の高齢化と野生動物管理に関しては、改めて議論が必要になるだろう。

⁴⁸ Eさんへの聞き取り(2023年8月4日)より

るみたいな⁴⁹」と他の農家への協力をしていると話す。以上の一連の語りからは、「自分の土地は自分で守る」ことに関する、農業従事者同士の暗黙の共助の存在がうかがえる。

では、猟銃を持っていない農業従事者は「自分の畑は自分で守る」という認識を持っていないのだろうか。市街地周辺で農業を行う男性 D さんの語りを紹介したい。ある農業従事者が地域の猟師 L さんの会社に畑のパトロールをお願いしていた⁵⁰という話に対して、「基本は自分で見回りするのが基本だと俺は思う⁵¹」と以下のように語ってくれた。

筆者：やっぱり自分の土地は自分で守って？

D さん：そうだね、見た方が。まあ、ハンター（＝猟師）の人がね、車通ればシカはすぐ逃げるから。車覚えるから。だから何もしない車だなんて思ったら逃げないから。

筆者：じゃあやっぱりハンターじゃない方も、自分の農地とかによく通ってれば、（シカも）その車覚えて？

D さん：覚えて逃げてくし、で、いたらロケット花火鳴らしたりとかさ。追っ払えば、嫌がることをすればね、やっぱそこにいたら嫌だなんて動物も思うから。

筆者：なるほど。シカがいたら（B さんも）ロケット花火とか結構使われませんか？

D さん：使う、使う。うん。追っ払うのにね。まあ、近づくだけでも逃げてくからさ、人間には向かってこないからさシカは。

D さんは、野生動物対策のためにも、自身が畑に毎日通うことが大切だと語る。実際、B さんは特別なことが無い限り、毎朝 5 時前頃から 2 時間程度、自身の畑のパトロールを行うという⁵²。

では、狩猟免許を取得しない理由は何かあるのだろうか。D さんが狩猟免許を取得しない理由について、以下のように語ってくれた。

D さん：（狩猟免許）取らないの？とかって言われるけど、取るには取りたいけど、シカ撃って後処理がねっていう。撃つだけならいいんだけどって言って。あとね、

⁴⁹ E さんへの聞き取り（2023 年 8 月 4 日）より

⁵⁰ D さんと同じく市街地周辺で農業を行う K さんへの聞き取り（2023 年 7 月 19 日）より。K さんは、野菜直売所の運営等、農作業以外のビジネスにも力を入れている農業従事者である。D さんおよび K さんが農業を行う地域は、前述した浦幌町内の 2 つの猟友会のうち、浦幌猟友会の管轄であり、浦幌猟友会には狩猟を生業としている猟師さんが存在している。その猟師 L さんはジビエ販売を含めた狩猟関係の会社を運営している。そのため、K さんはある程度のお金を払い、その会社に畑のパトロールをお願いしていた（現在、その会社は人手不足もあり、パトロールの業務を中断しているとのことだった。）。

⁵¹ D さんへの聞き取り（2023 年 8 月 1 日）より

⁵² D さんへの聞き取り（2023 年 8 月 1 日）より

身辺調査入るじゃんつって。(警察による)聞き取りがあるから、そこであの人はダメだって言われたらさ、取れないじゃんつて⁵³。

筆者：ご自身的にはその、猟銃持ってやろうつていう気はあんまりない？

Dさん：無い。うん、まあ、撃ったところで、次また来るし、常に取ってたら、ま、処理とかもそうなんだけどね。弾のね、お金も今値上がりしてるみたいだから。だから、それならね、まあ、自分で撃たなくてもできることをやって、それで被害にあったら被害にあったで、もうしょうがねえなど。何もやらないで、ハンターにお願いしてギャーギャー言うのはやっぱ違うから、自分でできることをやって、最終手段がハンターさんかなつていう感じかな。で、やっぱりね、撃てることって決まってるからさ、山しょつたりとかさ、そういうさ。どこでもここでも撃てるわけじゃないからさ⁵⁴。

この語りから、実際に、Eさんが前述したような弾の値上げなども、狩猟免許の非取得に関係していることが分かる。一方で、自分自身でできる範囲の対策を行っており、それ以上の自身の手に負えない範囲の野生動物の被害は妥協点だと考えていることも分かる。しかし、Dさんも猟師さんの手を全く借りていないわけではない。「クマだけはやっぱ太刀打ちできないから」と、前述した狩猟の会社を経営する猟師 L⁵⁵さんに「クマだけはもう、すぐ連絡する」という⁵⁶。さらに、筆者の「猟師 Lさんがいれば、安心ですか？」という問いに対して、「安心安心。もう全然。で、まあ、M⁵⁸の年もいるしさ、俺はすぐ Lさんにもう連絡するから⁵⁹」と話してくれた。

以上の Dさんの語りから、自分自身でできることに最善はつくしているものの、やはり、猟師さんの存在は必要不可欠であり、とりわけヒグマに関しては、狩猟者を頼りにしていることが分かる。

⁵³ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

⁵⁴ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

⁵⁵ 猟師 Lさんは浦幌町内では、狩猟の腕に関しても信頼の厚い猟師さんである。

⁵⁶ Dさんは猟師 Lさんのことを「先輩」と呼んでいた。筆者の「たとえば熊とか鹿が出たときは、ハンターさんをお願いして駆除してもらおうとかですか」という問いかけに対して、「うん、クマ見つけたら連絡して。ま、先輩がハンターやってるんで」と回答されたことから、Dさんと猟師 Lさんの間柄が近いことが考えられる。そのため、Dさんが猟師 Lさんに「クマだけはもうすぐ連絡する」ことが、お二人の間柄だからこそ成立することも考えられる。

⁵⁷ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

⁵⁸ Mさんは、猟師 Lさんが経営する会社の若手従業員である。Lさんの第一弟子のような存在であり、ヒグマの狩猟の腕前も高いという。

⁵⁹ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

2-3-6 多様な人が関わるからこそその対策の難しさ

前項までの語りからは、浦幌町の農業従事者は「自分の畑は自分で守る」ことを基本に、時には共同での対策を行うなど、試行錯誤をしながら野生動物対策を行っていることが分かった。では、対策を行う中での課題にはどのようなものがあるのだろうか。

はじめに、「町役場および行政への要望はあるか」という問いに対する農業従事者の語りから見てみたい。筆者の「役場への要望はあるか」という問いに対して、多くの農業従事者が初めは、「特にないな」と答えたことに驚いた。一方で、話を聞いていくと、上述したような人手不足や資金不足など、野生動物対策に関する課題が無いわけではなことが分かる。では、なぜ浦幌町の農業従事者は困っていることがあるにもかかわらず、役場への要望は無いと答えるのだろうか。この問いに対して、以下の2点の要素が考えられる。

1つ目は農業従事者と役場の距離の近さである。農村地域の農家兼猟師のJさんは、

猟友会の事務局が役場、役場のあの、支所⁶⁰の近く。役場内で猟友会の事務局持ってるっちゃうのは、北海道中どこ探しても上浦幌しかない。昔からそういう感じで役場と繋がりあって。それで事務局を引き受けてもらって。役場、何やるっても全部役場経由するから、役場も逆に、(猟友会側に)色々要請出しやすいし、でお互いにメリットがある⁶¹。

と語り、特に猟師さんと役場は近い関係にあることが分かる。また、猟師でもなく、Jさんと異なり市街地周辺で農業を行うDさんも、筆者の「行政(役場)がこんな対策をしてくれたらいいなということはありませんか」という問いに対して、

いや、浦幌は結構檻とか色々活用さしてくれてるから、うん、やることはやってくれてると思うから、特にそこ、ま、シカ柵の修理とか、その辺のね、あの助成みたいなこととかはね、してくれたら、地域的には助かるのかなとかは思うけども⁶²。

と第一声で「浦幌は結構檻とか色々活用さしてくれてるから、うん、やることはやってくれてると思うから」と役場の対応への満足感を語っている。以上2名の農業従事者の語りから、浦幌町において、農業従事者と役場の関係はとても近く両者間で密接なコミュニ

⁶⁰ 浦幌町の役場は、市街地の庁舎と別に、農村地域である上浦幌地域に上浦幌支所を持つ(浦幌町ホームページ「庁舎・施設案内」より)。

⁶¹ Jさんへの聞き取り(2022年8月18日)より

⁶² Dさんへの聞き取り(2023年8月1日)より

ケーションがとられているからこそ、農業従事者の役場への要求は日々の中で解消されている可能性が考えられる⁶³。

農業従事者が、野生動物対策に関する課題が無いわけではないにもかかわらず、役場への要望は無いと答える2つ目の要因として、「自分の土地は自分で守る」という考え方から、「他者に頼って問題を解決してもらおう」という発想に結びつかない可能性が考えられる。以下、札幌でのヒグマ出没対策のための草刈り実施についての話の最中での、Eさんの語りを紹介したい。

Eさん：（札幌で実施されている河川敷の草刈りなどについて、）そういうの必要だよね。あ、やっぱ川とかも結構木が生い茂ってるところあったりとか。でも川の水とか飲みにくるから、やっぱその来ずらいようにとかも結構必要かなと思うんだよね。

筆者：それは上浦（＝上浦幌）でもですか？

Eさん：上浦でも。あ、行政の要望、それだわ。そう、川の木を切った方が、シカも隠れられないから来にくいんだよね。川の木を切った方がいいと思うな。

筆者：それは行政にやってほしいっていう感じですか。

Eさん：そうだね。いや、あれやれったら、川の木って、なんか下手に手つけちゃダメなんだよね。あ、その、なんか、あの、ま、水害とかそういう関係で。あんまり勝手に付けちゃダメだから、行政の方で、うん。川の木を切って見通しよくしてもらえれば、あの、野生動物が来づらいから⁶⁴。

以上の語りでEさんは、「あ、行政の要望、それだわ」と思い出したように、自身では手をつけられない範囲での対策である「川の木の手入れ」を行政への要望としてあげた。さらに、農家自身での草刈り等は行っているとし、話を続けてくれた。

他の地域も（草刈りを）やってます。草刈りサイズじゃね。やっぱりね、あんまり侵入とかはもうあんま関係ない。ただ、山の木とか。その、見通しが良くするるのが大事かな。あと、やっぱシカ柵の周りとかもやっぱ綺麗に、で、木とかも。あんまりシカ柵があつて、そこに木があるような感じじゃ良くないんで、その周りの木も切って、もうシカ柵だけあるような感じ？しちゃえば、ま、来づらいと思うんですよ。野生動物は、そこを飛び越えたりとか、見えちゃうんでね。そうい

⁶³ また、農業は浦幌町にとって重要な主幹産業であるため、農業や農業従事者に対する補助やフォローが手厚い可能性もある。

⁶⁴ Eさんへの聞き取り（2023年8月4日）より

うのをやっぱりちょっと行政の力借りながらやれたら、かなり違うんじゃないかな。切ってほしい⁶⁵。

上記の語りからもやはり、草刈り等、自身でやれることはやったうえで、自分の力ではどうにもならないことに対して、行政の援助を求めていることが分かる。

以上が「町役場および行政への要望はあるか」という筆者の問いに対する、農業従事者の語りから見た課題であった。しかし、「行政および役場への要望」というかたち以外にも、野生動物対策の課題について語られる。たとえば、Dさんの畑がある地域では、何年も前から変わらず、畑周りを囲んでいるシカ柵が私有林の存在などの理由から一部途切れており、そこからシカが入ってきてしまう問題があると語る。そんなDさんに対して、筆者が「シカ柵設置の見直しをするような会議などはないのか」と問うと、

あんまりかなあ。ただ、シカ柵利用組合みたいなのはあるらしいんだけど。で、まあ、要望として、ずらしてもいいかっていう要望とかもあげてるんだけど、やっぱりね、そういう、あの、町とかね、地主さんとかの絡みとかも色々あるから、なかなか難しい部分。自分が使ってる所だけならいいんだけど。地域で治したりとかすると、うん、JRとかも絡んでくるから⁶⁶。

と、自分だけではなく、多様な主体が関わるからこそ、なかなか改善されない現実があるという。Eさん、Dさんの語りからは、自分の力でどうにもできないことに課題を感じ、悩んでいることが分かる。「自分の畑は自分で守る」ために、自分たちでできることはやっているからこそ、自分の力の及ばない範囲での問題が課題として出てくるのだと考えられる。

2-3-7 「札幌のクマはすごい」

では、ヒグマを日々身近に感じながら生活をする浦幌町の人びとは、札幌など他地域でのヒグマ出没について、どのように見ているのだろうか。筆者が「札幌から来ました。クマについて聞かせてください」と浦幌の人びとに会うと、必ずと言っていいほど言われるのが、「札幌のクマ、今すごいよね」「札幌の方が大変じゃない？」という言葉だった。たとえば、Eさんは聞き取り中、急に思い出したかのように、札幌の東区に出没したヒグマについて以下のように語ってくれた。

⁶⁵ Eさんへの聞き取り（2023年8月4日）より

⁶⁶ Dさんへの聞き取り（2023年8月1日）より

〔前略〕 いや、でも、札幌って怖いですよ。ね、すごいよな。映像見たけど。アスファルトの上走ってぶっ叩くってすごい。すごいっすよね。いや、考えられないよね⁶⁷。

この E さんの語りからは、ヒグマの市街地への出没への驚きを感じられる。また、この市街地へのヒグマの出没への驚きは、浦幌町の市街地に住む方々も同じであった。図書館職員 C さんも、

町の中にはまず、滅多に降りてこないんだけど、去年は札幌のね、どこでしたあれ？東区でした？人、襲われたのは。ああいうのは、まれかもしれないね。町の中に、人間がいるところに、ヒグマが自ら危険を晒して降りてくることはないんで⁶⁸。

とヒグマの市街地出没は珍しいことであると語る。さらに、市街地に住む A さんは、

(ヒグマについて) うん、やっぱ、なんだろう、実感が無いっていうかね。札幌に出たとか、どこどこに出たとかって話は聞いて、いやおっかないねって話はするけど。浦幌町内でやっぱり出たって話はあんまり聞いたことがないので、そんなね⁶⁹。

と浦幌町ではヒグマの出没を聞かないため、札幌での出没の話聞いても、あまり実感が無いと語る。上記 3 名の語りからは、札幌のヒグマ市街地出没はイレギュラーであり、浦幌では起きえないことであると考えていることがうかがえる。実際、浦幌でのヒグマによる人身事故は、1975 年林内作業中の負傷事故以来発生しておらず（北海道）、浦幌町民にとって、ヒグマは常に身近に存在しているが、めったに人身事故等は引き起こさない対象と認識されているだろう。つまり、メディアで話題になっているようなヒグマの事例について見聞きした際、それを浦幌で起きることには置き換えず、どこか特別な出来事であるような認識を持っていると考えられる。

2-3-8 まとめ

以上、本節では、主にヒグマによる農作物被害が発生している上浦幌地域および市街地周辺地域で農業を行う、農業従事者のヒグマ認識およびヒグマとの関係についてみてきた。

⁶⁷ E さんへの聞き取り（2023 年 8 月 4 日）より

⁶⁸ C さんへの聞き取り（2022 年 8 月 28 日）より

⁶⁹ A さんへの聞き取り（2022 年 9 月 1 日）より

ヒグマは、シカと比較して農作物被害の総量は少ないものの、ヒグマ特有の被害があり、日々人身被害の可能性を感じる恐怖の対象でもあることが分かった。一方で、自分たちが「山に住んでいるのだから仕方がない」とヒグマの存在を受け入れていた。また、日常の気軽な話題としてもヒグマの話が出るなど、農業従事者にとってヒグマは、様々な意味で身近な存在であることが分かった。一方で、そんな農業従事者にとっても、札幌の市街地に出没をしたヒグマなど、他地域で話題になっているヒグマの実態には驚きを感じており、どこか特別な出来事として捉えていることが明らかとなった。

野生動物対策に関して、農業従事者は、「自分の畑は自分で守る」ことを基本としているが、共同での対策も行うなど、地域の実情に基づき試行錯誤をし、野生動物対策を実施していた。そのうえで、自身の力が及ばない多様な主体が関わる問題に課題を感じていた。

さらに、「自分の畑は自分で守る」と関連し、猟銃を持つ農業従事者と持たない農業従事者間では、暗黙の共助のような関係性があることが分かった。一方で、狩猟を行う人は限られているうえに高齢化しているとし、地域の高齢化による野生動物対策機能の低下を心配する人もいた。地域の高齢化と野生動物対策管理については、今後改めて議論が必要になるだろう。

2-4 第2章まとめ

以上、本章では、浦幌町内在住者のヒグマ認識およびヒグマとの関係について、聞き取り結果をもとに見てきた。ヒグマを身近に感じるかどうかの違いは、市街地または農村地域などといった、住んでいる地域の違いではなく、職業などヒグマとのかかわり方の違いによる可能性が高いことが分かった。

市街地在住者にとって、ヒグマの存在は当たり前ではあるが、実際に会うことや被害をうけることはほとんど無い。そのため、ヒグマは「身近だけど身近じゃない」「お化けみたい」な存在であった。一方で、農業を生業とする農業従事者にとってヒグマは、農作物被害を発生させるだけでなく、日々出会う可能性があり、恐怖を感じる対象であるなど、様々な意味で身近な存在であった。また、自分たちが「山に住んでいるのだから仕方がない」とヒグマの存在を生活の一部として受け入れつつ、「自分の畑は自分で守る」ことを基本として、できる範囲で日々試行錯誤をしながらヒグマを含む野生動物に向き合っていた。

以上のように、同じ一つの町に住む人びとでありながら、非農業従事者と農業従事者ではヒグマとの付き合い方やヒグマ認識が大きく異なることが分かった。今後、ヒグマ出没の未然防除など、町での新たなヒグマ対策を検討する際には、以上のようなヒグマとのかかわり方の違いを念頭に置いたうえで、適切な方法を検討する必要があるだろう。

3 地域社会目線のヒグマ対策のありかたとは

3-1 ヒグマ問題の難しさ

ここまで、農業従事者および非農業従事者のヒグマ認識、ヒグマとの向き合い方、対策や課題の現状について聞き取り結果をもとに述べてきた。本章では、聞き取り結果に加え、筆者が実際に地域に入り感じたことも含め、地域社会目線のヒグマ対策のありかたについて議論をしたい。

ヒグマに関する聞き取り調査を浦幌町内で行う中で目立ったのは、「シカの方が大変」「シカをどうにかしてほしい」という声であった。農業被害や人との接触がシカに比べると少ないヒグマの対策は、市街地の住民にとっても、農業従事者にとっても優先順位が下がる。また浦幌町では、ヒグマが市街地に出てきた経験が少ないため、市街地の住民は特に、ヒグマ出没を防ぐ未然防除の必要性を感じていない。地域の中でヒグマ対策が重要および必要であると捉えられていない中で、未然防除を含めた新たな取り組みを進めていく難しさがあることを改めて感じた。

実際、「地域ぐるみの獣害対策」の成功事例として語られる先行事例や先行研究（たとえば、布施・鈴木・中塚, 2013；中田・鈴木・稲葉, 2017；武山・金脇・吉元, 2022）では、対象動物がイノシシやサルなど、各地域において甚大な農業被害を生みだしている動物たちであり、住民も被害や対策に対して切実な思いを持っている事例が多くみられる。そんな中で、まだ住民にとって、切迫した状況ではないヒグマ問題は、「地域ぐるみの対策」を進めていくうえで地域住民の理解や協力を仰ぐ難しさがあると考えられる。切迫していない状態の中で、いかに未然防除を住民意識の中に浸透させていくのか、または住民以外でヒグマ対応をしていく体制をいかに整えていくのか、今後議論や検討が必要になるだろう。

なお、浦幌町周辺の森林でヒグマの生態について研究をしていた当時酪農学園大学修士課程の学生によると、浦幌町でヒグマの市街地出没が見られないのは、箱わなによる捕殺により、個体数の調整ができているからだという見立てもある。全道的にヒグマの個体数管理が必要だと言われていることも念頭に置くと、地域で長年行われてきた箱わなによる捕殺も全面的に否定するべきではない可能性もある⁷⁰。この件について検討するためには、

⁷⁰ ただ一方で、箱わなによる対症療法だけでは、ウエンカムイ（被害を引き起こす「悪い」ヒグマ）は減らないと言われている（佐藤, 2021）ことにも注意が必要である。実際、浦幌町農村地域の農業従事者である E さんは、「なんかこうね、住み分けできたらいいけど、僕らもね、そのほんと駆除するぐらいしか対策がないっていうか。罠仕掛けてね。いたら退治みたいな感じになっちゃってんだよね。来ないようにするにはってのはね。でも、畑のも食いたいな（笑）。で、いなくなっても、また次々白糖、ま、釧路の方面からやっぱ来るんです。ま、シカに関してはそうですけど。だから、もう、その、応急処置、応急処置みたいな感じでね、その度対応みたいな感じで、なんとか乗り切りたいな感じだなー今は。（2023年8月4日、Eさんへの聞き取りより）」とシカを含め、現在は駆除を行い

全道的なヒグマ頭数や遺伝情報の把握等、ヒグマの生態的な調査研究も同時に進めていく必要があるだろう。

3-2 地域でのヒグマ対策を考える

上述したように、今回聞き取りをさせていただいた市街地住民の声をみると、浦幌町のような山に囲まれた地域に住む人びとでさえも、ヒグマは「おぼけのような存在」であり、日常的に対策を行う必要がある対象という認識はない。なお、農村地域では過疎化の影響もあり、農作業の他に委員会等、地域活動に忙しくしている農業従事者も多い。実際、農村地域の若手農家 F さんは自身の畑付近の草むらに対して、「(野生動物対策として)草刈り 1 回ぐらいはするようにしてんだけど、隠れる場所減らさなきゃいけないと思うんだけど。手回らないよね⁷¹⁾」と日々の対策をしているものの、手が回らない場所もあるという⁷²⁾。

そこで、以下 D さんの語りをヒントに、地域でのヒグマ対策について考えたい。

D さんは、野生動物対策の中で大変なこととして、電牧柵やシカ柵などの管理⁷³⁾および見回りをあげ、農繁期だけでもその見回りのお手伝いをしてくれる人がいると嬉しいと語る。またその際、お手伝いをする方はボランティアではなく、仕事として任せたいという⁷⁴⁾。

以上の D さんの提案は、浦幌町でも実現可能性が高いと考えられる。実際、浦幌町内には市街地在住者でも農業従事者の畑仕事を手伝う人や、マルチワーカーとして複数職業を持ち生活をしている若者もいる。さらに、現状、農繁期にはアルバイトとして学生や海外の実習生を受け入れている農業従事者も多いため、外部から人を受け入れることに抵抗もないと考えられる。ただし、畑周りでの作業はヒグマに出会う危険性も伴うため、安全管理等の対策や検討は必須になってくると考えられるが、D さんが提案するような農業従事

続けるというかたちになっており、根本的な被害軽減にはつながっていないと話してくれた。

⁷¹⁾ I さんへの聞き取り (2022 年 9 月 1 日) より

⁷²⁾ 農村地域の多くの農業従事者は広大な面積の畑を持ち、畑の場所は地域内に散在していることも多い。さらに、多くの畑は森林または河川と接していることも多く、草刈り等の野生動物対策を行う際には、聞き取り結果内でも記述したように多大な労働力が必要となる。

⁷³⁾ 電牧柵やシカ柵、シカ網などの管理については、「大変なこと。大変なことはやっぱりね、電牧に関したら、やっぱり雑草の管理かな。少しでも触ったら漏電してしまうんで、その管理と、常にバッテリーとかね、電気ちゃんと流れてるかとかって、毎朝確認しに行ったりとかね (D さん)」、「電牧は効きますね。うん。やっぱりシカも入ってきづらいと思う。まくまもそうですけど。ただ、管理が大変なんですよね。もうね、漏電したりするから。草も生えさせられないし (E さん)」のように、対策の中でも大変なこととしてあげられる方が多かった。

⁷⁴⁾ D さんへの聞き取り (2023 年 8 月 1 日) より

者の手が回らない野生動物対策のお手伝いは地域での雇用を促す一つの手としても、検討の余地があるだろう。

また、町でのヒグマ対策を検討する際、地域ごとの特色も念頭に置く必要があるだろう。実際に、浦幌町は一つの町でありながら、農村地域、市街地地域、漁村地域と地域ごとに大きく特色が異なる。また、地域住民にとっても、各地域は「自分たちとは違う地域」という認識がある⁷⁵。たとえば上浦幌地域は、本別町の市街地が浦幌町の市街地よりも距離的に近いこともあり、浦幌町と本別町をまたいだ生活圏を持っている人が多い。野生動物の生活圏が地域をまたぐことから、隣り合った市町村など広域での野生動物対策の必要性が説かれているが、上述したような人びとの生活圏が市町村をまたがっていることも1つのプラス要素として考える必要も検討したい。

3-3 野生動物問題・地域での野生動物管理における聞き取り調査の有用性および役割

最後に、野生動物問題・地域での野生動物管理における聞き取り調査の有用性および役割について議論したい。

まず、対策および政策検討側にとって、聞き取り調査を行うことは、地域の特性や地域の実情を知ることにつながる。序章でも述べたように、地域での野生動物対策は、地域の特性や地域の実情に沿った対策を導入する必要があると言われている（鈴木，2013；佐藤，2021）。実際、鈴木克哉（2013：49）によると、ある集落ではうまく受け入れられた考え方や方法論であっても、別の地域では、それがたとえ被害を減らすための「効率的な提案」であっても簡単に受け入れられないことも少なくないという。そのため、地域の特性や地域の実情を知るとは、地域での野生動物対策を検討するうえで必要不可欠であると言える。

また、聞き取り調査を行うことは、地域住民自身も地域も野生動物について改めて考える機会になる。実際、筆者が浦幌町内で聞き取り調査を行っている際にも、ヒグマについて地域の方々へ聞き取りを行うことで、地域の方々もヒグマに気づき、考える機会につながっていると感じた。たとえば、聞き取り実施後、ヒグマに関する新聞記事の切り抜きを後日筆者滞在先まで届けてくれる人や、「普段クマについて考えることはなかったけれど、改めて考えてみた」と再会した際に改めてヒグマについて思うことを語る人などがいた。

⁷⁵ 実際、筆者が浦幌町内で聞き取りを行う中で感じたことである。上浦幌の方々には、市街地のことを、「浦幌」または「まち」と呼ばれることが多く、「あまり、まちのほうには行かない」とおっしゃる方もいた。また、市街地の方は、筆者がヒグマについて尋ねた際、多くの方が「上浦（＝上浦幌）の人は～だろうけどね」と農村地域と自身が住む市街地を区別してお話をされる方がほとんどであった。なお、本稿では取り上げることができなかったが、浦幌町内には「厚内地域」という漁村地域があり、こちらは市街地から車で約20分程度離れており、漁師さんが多く住む地域となっている。

今回の聞き取り調査から、実際地域では、ヒグマが近くに暮らしているにも関わらず、ヒグマにあまり意識を向けず暮らしている方々も多いことが分かった。ヒグマとの今後を考えていくうえで、未然防除が重要だと言われていることを考えると、まずは人びとが身近なヒグマをきちんと認識し、自分事として考える必要があるだろう。また、ヒグマを自分事として捉えることは、日頃の対策はもちろん、ヒグマの出没等、いざというときに地域の方自身を守ることにもつながる。このことを踏まえても、地域の方々へのヒグマとの関わりや認識の聞き取り調査を行うことは、有用であるといえる。

以上、地域の方々へのヒグマとの関わりや認識の聞き取り調査を行うことは、研究調査のためだけでなく、地域ごとの対策を検討し進めていくうえで重要になってくると考えられる。今後、北海道でのヒグマ対策や政策がより本格的に考えられていく中で、地域に実際足を運び、地域の方々への聞き取り調査を実施することは、対策および政策検討側にとってはもちろん、地域住民の方々にとっても「身近だけど身近じゃない」ヒグマを再認識するよい機会になるだろう。

4 結論

本稿では、北海道浦幌町を事例に、地域住民のヒグマ認識やヒグマと関係性について明らかにし、地域におけるヒグマと人の関わりおよびヒグマ対策について議論をしてきた。

ヒグマに対する認識の違いは、非農業従事者と農業従事者間で異なり、これは、ヒグマによる実質的な被害や関わりの有無が関わっていると考えられた。ヒグマとの遭遇や被害を受けることはほとんどない非農業従事者にとって、ヒグマは「身近だけど身近じゃない」「お化けみたい」な存在であった。一方で、農業を生業とする農業従事者にとってヒグマは、農作物被害を発生させ、日々人身事故の恐怖を想起させる存在でありながら、自分たちが「山に住んでいるのだから仕方がない」とヒグマの存在を生活の一部として受け入れ日常を共にする、様々な意味で身近な存在であった。

農業従事者にとって、ヒグマ対策は生活に必要不可欠なものであり、個人および農家共同でのヒグマ対策が行われていた。一方で、市街地在住の非農業従事者は、ヒグマ対策の必要性を感じる機会が少ない。そのため、ヒグマ対策として重要であるといわれている未然防除を含めた、新たなヒグマ対策を導入し進めていく難しさがあることが分かった。なお、今後、新たなヒグマ対策を検討し導入する際には、上述した地域ごとのヒグマ対策の現状や、ヒグマ認識の違いを考慮する必要があるだろう。

そのためにも、ヒグマ対策および政策を検討する立場の者にとって、地域に足を運び、人びとの声に耳を傾けることが重要になる。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、多くの皆様からのご厚意とご教示をいただきました。お世話になった皆様に、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

はじめに、調査にあたって多大なるご支援をいただいた浦幌町立博物館学芸員の持田誠氏をはじめ、私の拙い調査におつきあいをいただき、お話を聞かせていただいた浦幌町の皆様に心から感謝の意を申し上げます。皆様のご協力と温かい受け入れのお気持ちがあつてこそ、私の調査研究を進めることができました。

また、酪農学園大学の佐藤喜和教授をはじめ、酪農学園大学野生動物生態学研究室の皆さんには、同じ浦幌町でヒグマに関する調査をするものとして快く受け入れていただきました。ヒグマや浦幌町での調査研究について、多くの学びや経験を共有してくださったことに、心より感謝申し上げます。

そして2年間、迷える時には快く手を差し伸べてくださり、多くのご教示をいただいた宮内泰介教授をはじめ地域科学研究室の先生方に深く感謝を申し上げます。またゼミの先輩方、後輩の皆様、同期の皆様には、ゼミや日常の議論を通して多くの励ましや示唆を頂きました。皆様は研究を進めるうえでの大いなる支えでした。心から感謝の気持ちを申し上げます。

最後に、これまでお世話になったすべての方々の存在があつてこそ、この修士論文を書き上げることができました。改めて皆様に深く感謝の意を申し上げます。

参考文献

参考文献

- 浦幌町, 2021, 『浦幌町鳥獣被害防止計画』 https://urahoro.jp/soshiki_shigoto/sangyoka/rinmu/files/choujuuhigai_boushikeikaku_r4-6.pdf (最終閲覧: 2024年1月4日)
- 浦幌町博物館, 2021, 『浦幌の地理・歴史』 北海道民族学会第2回研究会.
- 遠藤優・三上直之・池田貴子, 2022, 「2021年度さっぽろヒグマ市民会議実施報告書:これからの札幌市民とヒグマをめぐる、ミニ・パブリックスの実践と展開」
- 門崎允昭, 2007, 『罨の実像』 北海道出版企画センター.
- 門崎允昭, 2020, 『ヒグマ大全』 北海道新聞社.
- 亀田正人・丸山博, 2003, 「ヒグマをめぐる渡島半島地域住民の意識と行動」『室蘭工業大学紀要』 53:65-76.
- 亀田正人・丸山博・前田菜穂子, 2007, 「ヒグマをめぐる厚沢部町および長万部町住民の意識と行動」『室蘭工業大学紀要』 57:1-15.
- 桜井良・江成広斗・松田奈帆子・丸山哲也, 2014, 「社会心理学理論を基にした野生動物に対する住民意識調査の実施とその検証-計画的行動理論と野生動物に対する人々の許容性モデルの応用事例-」『哺乳類科学』 54(2):219-230.
- 佐藤喜和, 2006, 「ヒグマの生態」天野哲也・増田隆一・間野勉編『ヒグマ学入門:自然史・文化・現代社会』北海道出版会, 3-21.
- 佐藤喜和, 2011, 「採食生態:環境の変化への柔軟な反応」坪田敏男・山崎晃司編『日本のクマ:ヒグマとツキノワグマの生物学』東京大学出版会, 37-58.
- 佐藤喜和, 2019, 「ただ駆除を続けても出没は減らない:ヒグマ管理における選択的駆除と未然防除のすすめ」北海道野生動物基金・北海道新聞社編『となりの野生ヒグマ:いま何が起きているのか』北海道新聞, 45-55.
- 佐藤喜和, 2021, 『アーバン・ベアとなりのヒグマと向き合う』東京大学出版会.
- 鈴木克哉, 2008, 「野生動物との軋轢はどのように解消できるか?—地域住民の被害認識と獣害の問題化プロセス—」『環境社会学研究』 14:55-69.
- 鈴木克哉, 2013, 「なぜ獣害対策はうまくいかないのか:獣害問題における順応的ガバナンスにむけて」宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか』新泉社, 48-75.
- 鈴木克哉, 2017, 「「獣害」を共生と農村再編させる昇華させるプロセスづくり」宮内泰介編『どうすれば環境保全はうまくいくのか』新泉社, 160-188.
- 武山絵美・金脇慶郎・吉元淳記, 2022, 「野生動物の新規分布拡大地域において地域主体の捕獲体制はどのように構築できるのか—海を越えてイノシシが移入した愛媛県中島本島に着目して—」『農村計画学会論文集』 2(1):17-26.

- 釣賀一二三, 2011, 「個体群と遺伝的変異：遺伝的多様性からみた地域個体群の保全」坪田敏男・山崎晃司編『日本のクマ：ヒグマとツキノワグマの生物学』東京大学出版会, 85-110.
- 豊島尚章, 2020, 「札幌南区石山地区から広がる持続的な河畔林草刈り」『ヒグマ』3(6):3-4.
- 中田彩子・鈴木克哉・稲葉一明, 2017, 「兵庫県における集落主体のニホンザル追い払い事例」『兵庫 ワイルドライフモノグラフ』5:102-114.
- 日本クマネットワーク編, 2020, 「クマ対策を知ろう！-基礎知識編&電気柵編-」『BEARSJAPAN』21(2):7.
- 布施未恵子・鈴木克哉・中塚雅也, 2013, 「集落ごとの自発的な猿害対策と成立要因—兵庫県篠山市4集落の事例から—」『農林業問題研究』49(2):310-315.
- 北海道, 2022a, 『北海道ヒグマ管理計画（第2期）本文』<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higuma/higuma.html>（最終閲覧：2024年1月10日）
- 北海道, 2022b, 『北海道ヒグマ管理計画（第2期）概要版』<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higuma/higuma.html>（最終閲覧：2024年1月10日）
- 北海道新聞社, 2019, 「ヒグマの基礎知識：生態と行動習性」北海道野生動物基金・北海道新聞社編『となりの野生ヒグマ：いま何が起きているのか』北海道新聞社, 20-30.
- 増田隆一, 2020, 「ヒグマ学とは何か」増田隆一編『ヒグマ学への招待：自然と文化で考える』北海道大学出版会, 1-11.
- 山本信次・細田（長坂）真理子・伊藤春奈, 2017, 「野生動物と押し合いへし合いしながら暮らしていくために」宮内泰介編『どうすれば環境保全はうまくいくのか』新泉社, 113-135.
- 閻美芳, 2017, 「野生動物に積極的に関わらない選択をする限界集落の“合理性”—栃木県佐野市秋山地区を事例として—」『環境社会学研究』23:67-82.
- 閻美芳, 2019, 「第10章 人と野生動物はどのような関係を築いているのか？」足立重和・金菱清編『環境社会学の考え方 暮らしを見つめる 12の視点』ミネルヴァ書房, 177-196.
- 早稲田宏一, 2020, 「札幌市におけるボランティアによる放棄果樹伐採の取り組み」『ヒグマ』3(6):5-6.
- Krofel, Mihaetal, 2021, “Human-Bear Conflict at the Beginning of the Twenty-First Century: Patterns, Determinants, and Mitigation Measure,” in *Bears of the World: Ecology, Conservation and Management*, ed. Vincenzo Penteriani and Mario Melletti, New York: Cambridge, 213-226.
- 参考 web ページ
- 浦幌町『トップ』「北海道十勝郡浦幌町ホームページ」<https://www.urahoro.jp/kurashi.html>（最終閲覧：2024年1月4日）

浦幌町『庁舎・施設案内』「北海道十勝郡浦幌町ホームページ」https://www.urahoro.jp/chosya_shisetsu/（最終閲覧：2024年1月6日）

浦幌町立博物館『卒業論文大発表会「浦幌のヒグマこんなに調べました 2023」』<https://museum-urahoro.jp/2023/01/28/higuma2023/>（最終閲覧：2024年1月7日）

浦幌ヒグマ調査会「情報」（浦幌ヒグマ調査会 Facebook）<https://www.facebook.com/Urahoro.higuma/>（最終閲覧：2022年2月23日）

川村さくら・平岡春人・佐野楓・岡田昇・松尾一郎・斎藤徹「突如現れたヒグマ、住宅街を疾走遭遇した時の対処法は」（朝日新聞デジタル、2021年6月19日）<https://www.asahi.com/articles/ASP6L6TXJP6LIPE02Z.html>（最終閲覧：2024年1月4日）

環境省『[ギモン解決編] 猟具の入手方法、保管方法（銃）』「狩猟ポータル」<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort8/hunter/tool.html#gimon>（最終閲覧：2024年1月3日）

農林水産省「鳥獣被害対策コーナー」<https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/index.html>（最終閲覧：2023年12月15日）

農林水産省『新たな農地・水保全管理支払交付金ー地域の手で農地・農業用水や地域環境を守る取組を支援しますー（パンフレット）』「農地・水保全管理支払交付金（旧農地・水・環境保全向上対策）」https://www.maff.go.jp/j/nousin/kankyo/nouti_mizu/（最終閲覧：2024年1月4日）

北海道『ヒグマ人身事故一覧（昭和37年度～）』「ヒグマによる人身事故発生状況」<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higuma/higuma-accident.html>（最終閲覧：2024年1月9日）